HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	「～たて」に関する一考察 : 「～たばかり」との比較を通して
Author(s)	中村, 重穂
Citation	北海道大学留学生センター紀要, 5, 16-30
Issue Date	2001-12
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/45618
Type	bulletin (article)
File Information	BISC005_003.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

北海道大学留学生センター紀要　第5号　(2001)［研究論文］

「～たて」に関する一考察
－「～たばかり」との比較を通して－

中　村　重　穂

要　旨

本稿は、日本語のアスペクト表現「～（動詞・連用形＋）たて」の意義素を國廣（1982）の意味分析の方法を用い、中村（1999）で分析した「～たばかり」との比較を通して、特にその語義的特徴と統語的特徴を分析したものである。

その結果、「～たて」の意義素には、語義的特徴としては「～たばかり」と同じく〈時間的直後〉と、さらに〈主要状態への質的転換〉という二つがあることが今回の分析によって新たに明らかとなった。

同時に、統語的特徴としては、「～たての［名詞］」という統語構造に於いては加工・生産活動を表す動詞が、また、「～たて＋接続表現」という統語構造に於いては主体または対象の質的変化を表す動詞（句）が前接することが判明した。

最後に、今後の課題として、「～たて」の前接動詞のより詳細な析出と分類及び学習者のための説明記述の改善の必要性を論じた。

〔キーワード〕「～たて」、意義素、時間的直後、主要状態への質的転換、統語的特徴

1.　問題の所在

日本語の接尾辞「～（動詞・連用形＋）たて」は、その意味として「～（動詞・た形＋）ばかり」の意味を持つものと説明されている。しかし、両者が同義かと言えば、以下の例に見られるように、特に形態論的に「～たて」に前接する動詞には一定の制約がある。（＊は文法的に不成立な文を表す。）

(a)　論争は、始まったばかりだった。

＊(b)　論争は、始まりたてだった。

従来の所謂国語辞典ではこの点に関する充分な説明が為されてこなかった

と同時に、日本語学習者のための辞書・文法書等に於いてもこれらの違いについては、後述するように、分明にされていない。そこで、本稿では、「～たて」を、文法機能上「～たばかり」とともにアスペクト補助詞[1]として捉え、筆者がNakamura（1990）及び中村（1999）で行った「～たばかり」の意義素分析の用例を手がかりにしながら「～たて」の意義素を考察することを目的とする。

2. 先行研究の概観

「～たて」に関する先行研究は少なく、筆者の管見に触れた範囲では、森田（1988）とグループ・ジャマシイ（1998）（以下ＧＪと略）の二点のみである。

森田（1988：662-664）は、「～たて」を接尾辞として捉え、その基本義を「動詞の連用形に付いて体言化させ、その行為がなされてからあまり時がたっていない意を添える。自動詞に付いた例も若干あるが、多くは他動詞について、その他動行為が終わったばかりの意を表し、結果的に、他動行為によって生じた事物が、生じて間もないこと、まだ新しい状態にあることなどを表す」と述べている。その上で、前接動詞の自他の区分に言及し、他動詞に関しては「「～たて」は決して終了した行為そのものを問題としているのではない。行為によって生ずる結果の価値を取りたてる意識なのである。だから、結果を生み出す他動詞、それも結果の価値に人為的意義を持つような動作動詞にまずつく」と述べ、さらに自動詞に関しては「その自動行為の実現によって行為主体に何らかの意味が結果的に生ずる場合には「たて」が付く」としている。そして、この説明にある「結果の価値」や「何らかの意味」という表現の内実については、「プラスからマイナスへ」及び「マイナスからプラスへ」という「価値の変動」を挙げ、このような「価値の変動」が「方向の固定している場合と…（中略）…後続する事柄によって正負の方向が異なる場合」を持つことを述べている。

また、ＧＪ（1998：198）は、「Ｒ-たてのＮ」「Ｒ-たてだ」（Ｒは動詞・連用形、Ｎは名詞）で、「動詞の連用形を受けて「…したばかり」の意味を表す。使える動詞は限られている」という説明を掲げ、その例として；

（誤）　読みたての本。

（正）　読んだばかりの本。

の二つを挙げている。

これらに共通するのは、「～たて」が「～たばかり」の意味を表すという点である。その上で、森田は「結果の価値とその変動」を伴うことを、ＧＪは前接動詞に制限があることを述べているのであるが、そこにはいくつかの問題が存在することを指摘しておかなければならない。

森田（1988：664）は、「～たて」の関連語として「～（た）ばかり」にも言及し、これを「動作や作用・現象の成立の直後」を表し、「その動作や作用が直前に終了したこと、つまり現在は終了した直後であることを述べるだけであって、特にその結果や、結果の価値などは意識しない」ものであるとしているが、この分析が充分ではないことを、筆者は既に Nakamura（1990）で指摘・批判しておいた。従って、森田の場合、「～たて」を「～たばかり」によって説明しようとしているものの、その「～たばかり」の分析が不充分である以上、「～たて」の意味説明の妥当性を再検討する必要がある。

また、森田は、（理由は明らかにしていないが）「～たて」を説明する際に、全て「～たての［名詞］」という名詞修飾構造のみを扱っている。しかし、このような名詞修飾化は意味の顕れ方に影響を与えるー例えば、一部の意義特徴に抑圧が生ずる、等のーおそれがあり、かかる統語構造の偏りによってその解釈の信頼性が問題となることから、ここでも森田の諸論は再検討を要する。

これに対して、ＧＪ（1998）は、例文に複数の文型を挙げており、また、意味を森田同様「～たばかり」によって説明しているが、既に中村（1999）で見たように、その「～たばかり」の意味説明は森田（1988）よりも適切な形で踏み込んでおり、これらの点では差し当たり問題はない。しかし、前接動詞に制約があることを指摘しながら、「読む」一例を示すのみで、その内容について何ら言及していないことは辞典の記述として適切なものとは言えず、また、前接動詞に制約があることそれ自体が、「～たて」を「～たばかり」の意味によって説明することの問題点、即ち両者の意義素レベルでの同一性の是非について再考の余地があることを示している。

以上の先行研究の概要と問題点を踏まえた上で、以下では「～たて」の意義素を、差し当たりこれと同義と考えられている「～たばかり」との比較を通して考察し、前接動詞の性質についても一定の判断を示すことにしたい。

3. 分析の対象と方法

本稿でも Nakamura (1990) 及び中村 (1999) と同じく國廣 (1982) による意味分析の方法を用いた。本章では、まず、分析の基礎資料の抽出について簡単に説明しておく。

3.1 基礎資料の抽出の手順

今回利用する基礎資料の抽出手続きは、以下の通りである。

1) 小説; 評伝、エッセイからなる計25冊の文献から「～たて」23例を採集し、用例中の「～たて」を「～たばかり」と併記 ([動詞・連用形＋たて　動詞・た形＋ばかり]) して選択式の質問項目化し、中村 (1999) で「～たばかり」の適合性調査を依頼した日本人インフォーマント３名 (30代２名と40代１名の東京語話者)[2] にその適合性について (両者とも適合あるいは不適合の場合も含めて)内省による判定を依頼した。
2) 上記１) の結果から、インフォーマント３名全員が「～たて」のみが適合すると判定した用例５例を抽出した。
3) 中村 (1999) で「～たばかり」の適合性が確定した39用例の「～たばかり」の箇所を「～たて」に書き換え、その適合性を問う質問からなる調査票を用いて、上記のインフォーマントに「～たて」の適合性について内省による判定を依頼した。
4) 上記３) の結果から、インフォーマント３名全員が「～たて」のみが適合すると判定した用例13例を抽出した。
5) 上記２) 及び４) を本稿での分析の基礎資料とした。

3.2 分析の方法

分析の方法としては、3.1に記したように、まず対照的作業原則〔國廣 (1982：241-243)〕に則り、原文が「～たて」の資料に対して「～たばかり」を対比項として「～たて」のみが適合する用例を抽出した。これによって最小対立的文脈〔國廣 (1982：242)〕を確定し、それらの paradigmatic な関係を見ることによって、２でＧＪを批判しつつ指摘した「～たて」の前接動詞の特徴を解明し、併せて呼応の作業原則〔國廣 (1982：202)〕によって syntagmatic な関係を見ることによって統語構造上の特徴を明らかにすることを試みた。これら以外の paradigmatic に互換可能な文脈的意味分野〔國廣 (1982：222-223)〕を持つ用例は除外した。

さらに、中村（1999）で「～たばかり」の適合性が確定した用例を用いて「～たて」との意義特徴の異同あるいは転用の可能性を検討することを目的として、文脈的同義による方法〔國廣（1982：218)〕によってインフォーマント全員が「～たて」との paradigmatic な互換性を認定した用例を抽出し、これらからも「～たて」の前接動詞の特徴を明らかにすることを試みた。

以上の文脈的作業原則〔國廣（1982：202)〕を通じて「～たて」の意義素に認められる意義特徴とその統語構造上の条件の解明を試みた。その際、単文レベルでは判断が困難な用例については中村（1999）の分析と同じく前後の文脈からも検討を行った。

3.3 基礎資料となる用例

以下に分析の対象とした用例を示す。（　）内の略号は書名、数字は頁を表す。正式書名は稿末に掲載した。番号については、「～たて」が原文である用例は調査票の通し番号をそのまま使用し、「～たばかり」を「～たて」に書き換えたものは、中村（1999）の「～たばかり」の調査票の番号を〔　〕で囲んで使用した。

なお、調査票には「～たて」を含む文を文脈レベル（概ね段落単位、但し文の主題や対象に応じて前後の段落も含む）で記載したが、本稿では紙数の都合上「～たて」を含む文のみを記載し、中村（1999）では「～たばかり」に関して記載した〈否定的評価〉を含む後続文あるいは文脈は省略した。但し、分析の必要に応じて以下で前後の文脈を提示することもある。

5．焼きたてピザを手にした人たちが、釣り銭を缶に入れていった。
（ね・42）

10．イカも捕れたてを海水で締めてあるので、コリコリとした歯ごたえがたまらない。（泊・95）

13．炊きたてのごはんが美味しいように、パンも焼きたてが最高だ。店にはまだ温かいパンがずらりと並んでいる。それを見ると、僕はいつも笑顔がこみ上げてくる。僕がこの町の食生活でとりわけ気に入ったのは、毎朝焼きたてのパンが食べられることだ。（イ・34）

〔9〕．その頃、万紀子は美術大学に入学したてだったが、一年も経たないうちに家を出て、学校の近くのアパートに移っていった。（瑠・97）

〔24〕．入社したてで緊張が続いていた上に、一時間以上もラッシュにもま

れることに慣れていなかったからだろうと思っている。　(彼・124)

〔76〕. 帰国したてであり、児島もさすがに腰を上げるわけには行かない。
(わ・176)

〔95〕. ぼくがフォーク評論家としてデビューした七一年秋頃は、拓郎はデビューしたてでまだ売れていなかったし、陽水はまだデビューさえしていなかった。　(新・79)

〔145〕. 理恵は外国通信社に入社したてで、新しい仕事のプレッシャーがあった。　(バイ・17)

〔149〕. ここはいま大きな大学になっていますが、その当時はできたてで、大学院しかなかった。　(精・57)

〔150〕. できたてだったから、学生より先生の方が数が多かった。
(精・58)

〔151〕. といっても、ＵＣＳＤの場合、できたてで、まだ学部の学生をとっていなかったから、ティーチング・アシスタントといっても名ばかりで、実際には何もしなかったんです。　(精・68)

〔153〕. ＵＣＳＤは、いまは非常によくなったけど、当時はできたてで、知っている人が少ないローカル大学です。　(精・118)

〔174〕. 大学を出てサラリーマンになりたてで、生意気な盛りのころの話である。　(バ・205)

〔181〕. また、太田はフランスから帰国したてで、後期印象派のスタイルを学んできた画家として批評家にも注目されていた。　(日・194)

〔248〕. 私が大学へ入りたてで、口紅のひき方もしらなかった頃、幼稚園からエスカレーター式に進み有名女子大の英文科に入った彼女は、週に二回、赤坂プリンス・ホテルの美容室にトリートメントに通うのを習慣としていた、といったらほぼ想像がつくだろう。　(花・106)

〔261〕. 突っぱねようと思ったのだが、ハッセル・ブラッドの新しいカメラを購入したてで、事務所にその代金のローンを組んでもらって間もない立場としては、断るわけにもいかなかった。　(東・139)

以上が、今回の分析の基礎資料である。これらの用例は、以下の分析に於いても必要に応じて引用することとする。

4. 分析

4.1 分析(1)：基礎資料からの意義特徴の抽出と問題点の提示

まず、「～たて」を原文とする用例を見ると、「～たて」のみが適合性有りと判定された；

5．焼きたて

10. 捕れたて

13. 炊きたて／焼きたて（2例）

は、「ピザ、イカ、ごはん、パン」という食品類の名詞と共起し、また、動詞「焼く／炊く」はこれらの食品を加工、製造する活動を表し、動詞「捕れる」は－直示的には食品の加工、製造ではないが－この場合イカが水揚げされ、それが生食用食品となることとして捉えていることから、これらの動詞はいずれも広義に「加工・生産活動」という意味を共有すると考えることができる。

さらに、上記用例－特に10、13－には、「コリコリとした歯ごたえがたまらない」「美味しい」「最高だ」という表現、即ち上記動詞が表す加工・生産活動の直後に生起した一定の（ここではプラスの）状態の表現が後続しており、この点に関しては前述の森田（1988：663）の「行為によって生ずる結果の価値を取りたてる」意味を認めることが可能である。

また、統語構造上「～たばかり」には顕れなかった点として、「動詞・連用形＋たて」という語構造それ自体の名詞化（「捕れたて」、「焼きたて」）及びこの名詞化した語構造にさらに名詞が付加される複合語化（「焼きたてピザ」）があるが、これらは、先に森田も述べていたように「～たて」が接尾辞として有する品詞性の決定機能による名詞化であり、「～たて」の意義特徴の内の品詞的特徴と考えることができる。

そこで、本節での考察の範囲から「～たて」の意義特徴－特に統語的特徴と語義的特徴－を、まず；

①加工・生産活動を表す動詞が前接する。

②上記①の活動終結直後を表す。

③上記②に於いて生起した一定の状態・価値が存在する。

の三つを有するものとし、次にこれらの意義特徴を、「～たばかり」を原文とする用例と対比して検討を進めることにする。

「～たばかり」を原文とする用例を見ると、「～たて」との適合性調査で「～たて」のみが適合性有りと判定された用例は；

〔9〕. 入学したて
〔24〕〔145〕. 入社したて
〔76〕〔181〕. 帰国したて
〔95〕. デビューしたて
〔149〕〔150〕〔151〕〔153〕. できたて
〔174〕. なりたて
〔248〕. 入りたて
〔261〕. 購入したて
の8種13例である。これらの内〔261〕を除く7種12例は、文脈から見てみるとそれぞれ高校生から大学生へ、学生から社会人へ、海外から母国へ、アマチュア・ミュージシャンからプロへ、未完成から完成へといった身分や状況の変化を表し、ここから差し当たり；

④「～たて」の前接動詞の主体または対象が以前とは異なる状態に移行する。

という新たな意義特徴が抽出され得る。

また、統語構造としては、「～たて」を原文とする例に見られるような名詞化・複合語化は現れていないが、これは「たて」と「ばかり」の品詞的相違によるものであり、また、調査に用いた中村（1999）の原文がそもそも「～たばかり」に何らかの判断形式や接続形式が後続するものであったことによっている。

しかしながら、これらの諸特徴から「～たて」の意義特徴を最終的に確定するには、解決を要する幾つかの問題点がある。

第一には、上記特徴の①と④を統合し得る視点がまず設定されなければならない。「～たて」を原文とする①の動詞群を「～たばかり」を原文とする④の動詞群と比較してみると、これらの内①の「加工・生産活動」の意味と重なる④の動詞は、〔149〕〔150〕〔151〕〔153〕の「できたて」のみであり、その他の用例に「加工・生産活動」という意味を認めることは困難である。これらは、それぞれ後続節の統語的特徴とも共起しているものであるため、その影響により性格の異なった前接動詞群が顕れていると考えることができるが、意義素分析のためにはこれらの前接動詞群に関して共約可能性を持つ特徴が析出されなければならない。

第二に、④と⑤を抽出する際に除外した〔261〕「購入したて」がこの共約可能性の内に位置づけられるか否かということも検討する必要がある。

次節では、上記の諸問題点に解答を与えることを試みることにする。

4.2 分析(2)：問題点の検討

4.2.1 前接動詞の性格と意義特徴

本節では前節で述べた諸問題点の内前接動詞の性格を検討するが、その際、〔261〕の「購入する」はひとまずおいて検討を行うことにする。

4.1で挙げたように「焼く」「炊く」「捕れる」は加工・生産活動を表す動詞としてまとめることができるが、ここで、加工・生産という活動をあらためて考えてみると、もともと原料となるものーここでの用例5，10，13では海産物や植物の種子等ーにある働きかけをして主体の目的に適ったものーここでは食品ーに質的に転換させる活動である。ここで、加工・生産活動が持つこの「質的転換」という部分に着目してみると、①の「加工・生産活動を表す動詞が前接する」という規定は、④で述べた「「～たて」の前接動詞の主体または対象が何らかの形で以前とは異なる状態に移行する」という規定と重なってくることが明らかである。これにより、①と④の共約可能性をもった規定として；

⑥「～たて」はその前接動詞の表す働きかけによって主体または対象に以前と異なる状態への質的転換を生ずる意味を有する。

という意義特徴を定立することができる。

ここで、さらにこの⑥をもとに「～たて」が適合する用例を検討してみると、そこに顕れている質的転換は単なる変化ではない。このことを①の用例と④の用例に分けて検討してみる。

まず、〔261〕を除いた④の用例を検討してみると、それらは既に4.1で述べたように；

〔9〕．入学したて…高校生から大学生へ

〔24〕〔145〕．入社したて…学生から社会人へ

〔76〕〔181〕．帰国したて…海外から母国へ

〔95〕．デビューしたて…アマチュア・ミュージシャンからプロのフォークシンガーへ

〔149〕〔150〕〔151〕〔153〕．できたて…新たに設立されて運営されている大学(の出現)

〔174〕．なりたて…学生から社会人へ

〔248〕．入りたて…高校生から大学生へ

という身分・状況の変化を表す。そして、これらの変化を文脈上で見てみると、これらの前接動詞が表す活動の結果（＝その時間的直後に）具現した、大学生、会社員、プロ・ミュージシャン、母国在住、大学（運営）といったものは、その場面での主体または対象にとって－他に様々な身分上のあるいは社会的な属性はあるであろうが－その主体または対象のあり方の内の一定の代表機能を果たす身分・性質・状態等を表していることが解る。つまり、「～たて」によって示される質的転換は、単なる以前とは異なった状態だけでなく、同時に主体または対象にとって何らかの主要な状態への質的転換であるということができる。

ここで翻って①の用例を見ると；

5．焼きたて

10．捕れたて

13．炊きたて／焼きたて

は、前接動詞の対象への働きかけの結果（＝その時間的直後に）具現したものが単に食品というものである＝食品という状態への質的転換というだけではなく、4.1で述べたように加工・生産された直後の食品が当該食品としての主たる＝食する上で適当な状態であることを示している。

ここから、①と④を⑥を媒介して集約した意義特徴として；

⑦「～たて」は、その前接動詞が表す働きかけによってその主体または対象に質的転換が生じ、当該文脈に於けるその主体または対象のあり方の主要な状態が生起する意味を有する。

という結果が得られることになる。そして、この結果を見る限り、2で引用した森田（1988：663-664）が言うような「プラスからマイナスへ」及び「マイナスからプラスへ」という「価値の変動」が「方向の固定している場合と…（中略）…後続する事柄によって正負の方向が異なる場合」があるということは－時間の経過に伴って結果としてそのようなことになるという想定は可能であっても－「～たて」の意義特徴としてはさして重要ではなく、むしろ前接動詞の表す活動の終結直後に生起した状態それ自体（の主要な性格）に話者の焦点が置かれていると考える方が妥当であり、4.1で措定した③＝活動終結直後の一定の状態・価値の存在という意義特徴もこの⑦に包摂されると捉えてよいであろう。[3)]

次節では、ここまでの結果が、先に保留した用例〔261〕の前接動詞「購入する」にも妥当するかどうかを検証することにしたい。

4.2.2 用例〔261〕「購入したて」の検討

まず、用例〔261〕をあらためて見てみることにする。

〔261〕. 突っぱねようと思ったのだが、ハッセル・ブラッドの新しいカメラを購入したてで、事務所にその代金のローンを組んでもらって間もない立場としては、断るわけにもいかなかった。

この場合、「～たて」の前接動詞「購入する」は、これ自体としては一般的な動作動詞であり、前節までで考察した加工・生産活動の動詞でも以前とは異なった状態への移行を表す動詞でもない。しかし、文脈で捉えてみた場合、動詞の主体である人物はカメラマン[4)]であり、動詞が表す動作の対象は「ハッセル・ブラッドの新しいカメラ」であることを考えると、この「カメラマンが新しいカメラを購入する」という行為は、それによってカメラマンという主体の業務にとって主要な、カメラマンがカメラマンとして働ける状態（＝必要な機材が揃っている）を「新しいカメラ」によって具現させることになり、前節までで明らかにした意義特徴と背馳する点は認められない。

但し、この〔261〕の検討からさらに注意すべき点として、ここでは「購入する」という動詞だけでなくこれにカメラマンという主体とカメラという対象が文脈内に並立的に明示されてこそ〔261〕が前記の意義特徴⑦と合致することが明らかになったものであり、本稿が前節までで行ってきた、そしてまたＧＪが述べているような前接動詞に焦点を絞った説明は－文脈にもよるが－むしろ前接動詞または前接動詞句として説明する必要があることを付言しておきたい。

5. まとめ－結論と今後の課題－

以上の諸分析から、本稿の考察の目的である「～（動詞・連用形＋）たて」の意義素を構成する意義特徴をあらためて整理すると、まず語義的特徴としては；

a．ある動作・行為が終結した直後という〈時間的直後〉

b．上記ａの動作・行為によってその主体または対象にそのあり方の主要な状態が新たに生起するという〈主要状態への質的転換〉

の二つにまとめることが可能であり、また統語的特徴としては；

c．「～たての［名詞］」という名詞修飾型構造に於ける加工・生産活動を表す動詞（句）の前接

d.「～たて＋接続表現［→後続文］」という構造に於ける主体または対象の変化を表す動詞（句）の前接

の二点に集約される。

以上をもって、「～たて」の意義素分析に関してひとまず結論を得たこととしたいが、今後さらに検討すべき課題として、本稿でも考究の対象とした「～たて」の前接動詞（句）の析出と区分及びそれらの説明記述の改善の必要性を挙げておきたい。既に第２章で見たように、森田（1988）は伝統的な自動詞⇔他動詞の枠組みでこの問題を処理している（その理由は明らかにしていない）が、本稿で明らかになったのはむしろ上記ｃ及びｄという区分であり、特にＧＪ（1998）のような日本語学習者のための辞書記述のあり方を勘案した場合には、森田の区分は妥当なものとは言えない。筆者は、第2章にも記したように、本稿でＧＪの記述の不備を多少なりとも補おうと試みたが、上記の筆者の区分でもそれが充分であると断定するには量的にも質的にもさらなる資料と分析が必要とされる。この課題の着手・遂行については他日の機会を待つこととしたい。

註：

1）「アスペクト補助詞」という術語は広く通用しているとは言えないが、本稿では山田（1996：10）にならってアスペクトの文法的カテゴリーを付加する機能を果たす語をこのように呼ぶことにした。

2）このインフォーマント３名は、中村（1999）では「（全員30代の東京語話者）」となっていたが、その後の経年により標記のようになったものである。

3）ここで、筆者の述べる「主体または対象のあり方の主要な状態」とは畢竟森田（1988）の言う「結果の価値」と同じことではないかという疑念が提出されるかもしれない。しかし、－特に④の用例に関して言い得ることであるが－例えば〔9〕「入学したて」を考えた場合、高校生から大学生になった直後という状態は、そのことが直ちに「価値」を持つのではなく、むしろこの状態が当該文脈に於いて主体が主にそこに属するものとして語られる「帰属」（あるいは「範疇」）を明示的に表しているものであると筆者は考えており、この点で森田の論とは異なっている。

4）これについては、本文中では削除してあるが調査票に掲載した原文にはこの〔261〕の引用文の前にさらに以下のような記述がある。したが

って、インフォーマントは全員この主体がカメラマンであることを知った上で内省を行っている。

「今回の撮影だって、本当は別なカメラマンが担当する筈だったのだ。それが、出発の二日前になって、撮影中に崖から落ちて足を骨折するという事故が起き、急遽、同じ事務所に所属する俺におハチが廻ってきたというわけだ。」

参考文献：

國廣哲彌（1982）『意味論の方法』大修館書店

グループ・ジャマシイ（1998）『教師と学習者のための日本語文型辞典』くろしお出版

中村重穂（1999）「再び、「～たばかり」について－意味論的観点から－」『北海道大学留学生センター紀要』第３号　pp.30-54　北海道大学留学生センター

森田良行（1988）『基礎日本語辞典』角川書店

山田小枝（1996）「品詞の普遍性と特殊性－ヨーロッパ言語の研究から－」『国文学解釈と鑑賞776　特集：品詞とは何か』第61巻第１号　pp.6-13　至文堂

NAKAMURA, Shigeho (1990) "On the Japanese Aspects '-tatokoro' and '-tabakari' -from a semantic point of view-" in *Hitotsubashi Journal of Arts and Sciences,* vol.31, No.1, pp.1-7 Hitotsubashi Academy, Hitotsubashi University

用例出典（副題省略）

池田忍（1998）『日本絵画の女性像』筑摩書房（日）／大沢周子（1989）『バイリンガル・ファミリー』筑摩書房（バイ）／景山民夫（1992）『東京ナイトクラブ』角川書店（東）/香咲弥須子（1989）『彼女のライダーズ・シック』角川書店（彼）／香咲弥須子（1992）『瑠璃色の時間』角川書店（瑠）／香咲弥須子（2000）『ねこの神様』講談社（ね）／篠利幸（1998）『イタリアの田舎に泊まる』ＮＴＴ出版（泊）／城山三郎（1997）『わしの眼は十年先が見える』新潮社（わ）／立花隆・利根川進（1997）『精神と物質』文藝春秋社（精）／富澤一誠（1988）『新宿ルイード物語』講談社（新）／芳賀八城（1997）『イタリア生活あるでんて』ＫＫベストセラーズ（イ）／

林真理子（1991）『花より結婚きびダンゴ』角川書店（花）／山崎武也（1995）『バカな上司につける薬』三笠書房（バ）

謝辞

本稿執筆に当たり、適合性調査にご協力を頂いたインフォーマントの方々に厚くお礼申し上げる。

なかむら　しげほ（留学生センター助教授）

Journal of the International Student Center Hokkaido University No. 5 (2001)

A study of −TATE: in comparison to −TA BAKARI

NAKAMURA, Shigeho

In this paper, the author analyses the semantic features in the sememe of the Japanese aspectual expression −TATE in comparison to −TA BAKARI, using the methodology of semantic analysis in Kunihiro (1982).

As a result, two lexical semantic features ⟨immediately after⟩, similar to −TA BAKARI, and ⟨qualitative change into an essential condition⟩ were discovered. On the other hand, as syntactic features in the sememe, it was found that a verb of productive/processing activity precedes −TATE in the structure [−TATE NO + noun] and a verb expressing qualitative change of the agent or object precedes −TATE in the structure [−TATE + conjunction equivalent + following clause].

Finally, as a remaining problem, further investigation of verbs which appear before −TATE and, based on this, improvement of grammatical explanations for Japanese language learners will be needed.